

デュエーポイント2

患者さんのやる気を引き出す事例も

バイタル情報が自動送信される見守り支援システム

たかさわ糖尿病内科クリニック

たかさわ糖尿病内科クリニック（函館市）では、通常の外来診療に加え、遠隔診療の取り組みにも力を入れている。活用しているのは、「ニプロハートライン」というシステムで、24時間の見守り支援を可能としている。

患者さんに貸し出したアイパッドと高澤宏文院長のアイ



高澤宏文院長

パッドをつなぎ、バイタル情報（血圧、SPO₂、血糖値、体温）が院長のもとに送信される仕組み。メーカーで用意した電子血圧計、パルスオキシメーター、自己血糖測定器、電子体温計を患者さんが自己測定すると、各機器からアイパッドに自動送信され、リアルタイムの把握が可能となる。テレビ電話機能があることも特徴で、主治医は患者さんの表情を見ながら会話することが可能。また、緊急時アラート機能が付いており、バイタル値から異常が検出されると、主治医側の画像上にアラーム

音と共にポップアップ表示される。血圧等は患者さんによって適正値が異なるため、患者さんごとにしきい値を設定し、個別対応している。

「バイタル情報を24時間確認できますので、往診も含め早期対応はもちろん、場合によっては緊急対応につなげることができます」と高澤院長。自宅で家族が患者さんのケア



パソコン、電子体温計、自己血糖測定器、電子血圧計など遠隔診療で使われている機器

をしてている場合、体調変化をよく把握できず、対応の遅れにつながってしまうことがあるといい、見守り支援システムの有効活用が期待される。

同システムでは、オンライン診療を受けることも可能となる。薬が必要な場合には、クリニックから処方箋のコピーを患者さんに送り、同時に薬局にも処方箋を郵送。患者さんが薬局に薬を取りに行ってもよいし、郵送してもらうことも可能だ。

患者さんは薬局ともアイコンでつながるので、オンラインで服薬指導を受けることができる。高澤院長のクリニックでは、まずは従来の外来診療を受けてもらい、遠隔診療が可能であれば半年後から導入する流れとしている。

さらに同クリニックでは、企業への遠隔診療の導入も準備しているという。社員がバイタル値を測定すると、前述同様クリニックにデータが自動送信される。「身近で気軽な健康相談のような形につなげていきたい」としている。

以上が同クリニックにおける遠隔診療システムの大まかな内容だが、「将来的には、コメディカルや医療従事者なども含め、チーム医療で遠隔診療を進めるツールとしても期待できるのでは」と高澤院長は話している。

対面につながる 遠隔診療が重要

同クリニックでは、80代の女性がすでに同システムによる遠隔診療を導入し、良好な結果を得ているという。「患者さんにとっては『見守られている』という安心感だけでなく、『頑張らなくてはいく意欲の引き出しにもつな

がっているようです。アイコンの操作も早々に覚えて頂きましたし、当初は車椅子で通院していたのですが、現在では歩いて受診できるまで元気になりました。薬の量も減っていい状態を維持できており、遠隔診療の導入がそのきっかけになったと確信しています」。

一方、感染症や心疾患、結核をはじめ、血液検査や画像診断が必要な疾患は遠隔診療で把握することができない。着衣の乱れなどは、心理状態を把握するきっかけになるが、そうしたこともテレビ電話だけでは判断が難しくなる。通信機器がいかんが発達しても、まだまだ限界はあることも、高澤院長は付け加える。

「患者さん自身も直接医療者に話したいことはあるでしょうし、会いたくなるとおっしゃる患者さんもいらっしゃいます。遠隔診療は今後もニーズの高まりが期待されますが、必ず対面にもつながる遠隔診療としていくことが重要だと思います」。



テレビ電話を使って栄養指導を行っている様子